

か、言ひ換ふれば此の兩雄初度の接觸に於て如何なる光景が演ぜられたか、回教國の歴史にも支那の史乘にも、此等の點については、一向消息を傳へて居ないが、却つて第三者ともいふべき歐羅巴人の記録が此の事を詳述して居るのは甚だ面白いことである、かゝる現象は往々見えることで、例へば突厥部族の有様が東羅馬帝國の使者によつて傳へられたり、蒙古の事情が羅馬法王や佛蘭西王の使によつて今日に明らかにせられて居る如きはその一例である。もとよりその取捨に於ては充分の注意を要するけれども、事柄によりては利害の關係の薄い丈けに、極めて公平な記事を認めることが出来る、此の際に於る歐羅巴人といふのは西班牙カスチル王朝のヘンリー三世から、帖木兒に遣はされた使節一行の頭なるクラビーホ (Clavijo) のことで、彼は其の旅中に見聞したことを巨細洩らさず記録して今日に傳へたのである、彼が帖木兒に従がつて撒馬兒罕に入つたのは、丁度此の永樂帝の使が帖木兒の許に來て居た時であつて、親しく支那の使とも語り合つて其の模様をしるして居るのである。

さて永樂帝の帖木兒に諭した勅なるものは、クラビーホによつて次の如くに傳へられて居る、「王(帖木兒)がトルコ征伐から撒馬兒罕に歸つた時に、支那からの使が來て、王が曾て支那に屬する土地を占領せることを云ひ、そうして七年以來絶えたる毎年の貢を入れよとの命令を齎らした」と、支那の領地を占領して居るとの言ひ前は何を指して居るのか能くは解らないけれども、前朝の配下であつたチャガタイ汗國の一部を今帖木兒が占領して居るといふ様な意味でもあらうか、もしくは更に古い此の地方との關係を引つぱり出して來たものか、尤も割合に兩國の事情に通じないクラギゼウの語ることが、果してその儘眞であるかどうかは餘程考がへねばならぬが、其の帖木兒の答と、また之に關聯して彼の書いて居ることによつて考がへて見るとあまり疑がふべき餘地はない、則ち帖木